

## 『蛍のリレー』

「翔太、見てみろ。綺麗だろう。お前の生まれたこの土地はな、この時期になるとこうやって、たくさんの蛍が舞うんだ。綺麗だろう？ お前はもちろん初めて見ただろうがな、これが蛍だ。ほら、光が点滅しているだろ？ なんで点滅していると思う？ ああやって蛍同士で会話をしているんだな。蛍は人間みたいに喋れないから、あの点滅でコミュニケーションを取ってるんだ。ああ、綺麗だ。翔太、どうだ初めて見た蛍の感想は？ こんな見たことないだろ？ 綺麗だろ？」

「…ねえ、じいじ」

「ん？ どうした、翔太」

「僕さ、蛍見るの初めてじゃないよ」

「え？ そうなのか？」

「そうだよ。僕、蛍、見たことあるよ」

「あれ？ なんだ、そうか。一体いつ見たんだ？」

「いつ見たって、去年も見たし一昨年も見たし、その前も見たよ」

「ええ？ そうだったのか。てっきりじいじは、翔太は初めて蛍を見るもんだと思って、張り切って連れて来ちゃったよ。見たことあったか。残念だな」

「いや、あのさ、去年じいじと一緒に見たんだよ」

「…そうだったっけ？」

「そうだよ。去年もここに連れて来てくれたじゃん。一昨年も連れて来てくれたよ。その前もじいじと一緒に来たよ。毎年毎年じいじと一緒に見てるじゃないか」

「あれ？ ああ、そうか」

「そうだよ。で、毎年言うんだよ、それ。『初めて見た蛍の感想は？』って。で、僕は毎年答えるの。『去年も見たよ』って。全文、一緒なんだよ。『なんで点滅してると思う？』も一緒だし。

『初めて見た蛍の感想は？』もそうだし。なんなら『去年も見た』って言ったら毎年そうやって驚いてるよ。『ええ？』って。『そうだったっけ？』って。これでいくと、たぶん来年も驚くんだろうね」

「そうか。じいじは毎年、翔太をここに連れて来てるのか」

「そうだよ。ちなみにそれも一緒だよ。今のも一緒。『毎年連れて来てるのか』って。たぶん、来年も言うんだらうね。ここに僕を連れ出す時の言葉も毎年一緒だもん。『翔太、お前をとっても良いところに連れて行ってやる』って。なんか謎めいた感じで言うの。今年もそれ言ったし。僕ね、それ言われた時点でもう『あ、また蛍か』って。『またこの季節が来たんだなあ』って思ったんだもん」

「こりゃじいじが悪かったな。あ、じゃあそれならば今年翔太が知らないようなこともちゃんと教えてやろう」

「ああ、あれでしょ？ それで始まる説明は『蛍っていうのは、実は人のいる里に出るもので、昔なんかは残飯を川で洗った時に、その残飯で巻貝が育って、蛍の幼虫がその巻貝を食べて成長して、やがて成虫になったら、たった二週間で死んでしまう』でしょ？」

「…うん。そうなんだよ」

「そうなんだよね。僕、このやりとりを毎年してるからね。もはや完コピできるもん。やろうか？」

『翔太、蛍はな、だいたい二週間で死んでしまうもんなんだが、この土地の蛍はちょっと違うんだ』

『へえ、そうなんだ。どういう風に違うの？』『この土地の蛍はな、40日もの間、見ることができるんだ』

『へえ、そうなんだ。なんで？』『翔太に教えてやろう。まずゲンジ蛍が二週間、その後ヘイケ蛍が二週間、その後ヒメ蛍が二週間、順番に順番に出るんだ。だから他のところより長い間、蛍を見続けることができるんだ』

『へえ、そうなんだ。すごいね』『ああ、すごいだろう？』

『うん、すごいね』『翔太もな、せっかくこの土地に生まれたんだから、蛍を大事にするんだよ』

『うん、わかったよ』、まあここまでがワンセットだね」

「おお。翔太、まるで落語みたいじゃないか」

「そうなんだよ。もうはっきり言ってね、じいじがいなくても僕一人でじいじとの会話をここで再現できるよ」

「あ、そう。じゃあもう来年からは一人で来るか？」

「そうだね。できるからね、一人で。僕ももう毎年これやってるから、逆にこれやらないと夏が来ない感じがするもん」

「…で、じいじはこの後は何を言ったらいいんだ？」

「なんで僕に聞くんだよ。自分で思ったこと言えばいいじゃないかよ」

「いや、でもまあ段取りが決まってるならその通りにしようかと思って」

「段取りってなんだよ。まあ毎年のパターンでいけば、ここでじいじがこの土地に伝わってる歌を歌って、終わりだね」

「そうか。なんの歌を歌うんだ？」

「全部、僕に聞くなよ！」

「へえ、なんだか抜けてるおじいさんだったんだね」

「そうなんだよ。僕すごいおじいちゃんだったんだけどさ。その蛍の時期は毎年それやるからさ。もう言うこと全部覚えちゃったんだよね」

「なんでそんなことになっちゃったんだろうね」

「分かんないけどさ。でもさっき君が言った通り、とって抜けてる人というか、まあ面白い人だったんだよね。すごい懐いてたもん。好きだったなあ、おじいちゃん」

「へえ。なんか翔太のそんな話、はじめて聞いたかも」

「そうだったか？ まあ僕が中二の時に亡くなったんだけど、しばらく悲しくてさ。その年は蛍を見に行けなかったんだよねえ」

「ふーん」

「でもほんとに一緒にいると面白くてね。釣りも好きな人だったから、よく川釣りにもついて行ったんだけど。普通さ、おじいちゃんに釣り好きって言われたら、ずいぶん慣れてるもんだと思うでしょ？ 違うんだよ。すごい下手なんだよ」

「あ、下手だったんだ」

「そう。全然釣れないの。そばにいて、おじいちゃん全然釣ってくんないの。『おかしいなあ、おかしいなあ』って言いながら、竿を投げてたんだよね。で、隣りにいた僕が、バケツ使ってあっさり魚取っちゃったりして」

「簡単に取れたんだね」

「うん。だって、うようよ目の前で泳いでんだもん。竿なんか要らなくてさ。あとキャッチボールとかもよくしてくれたんだけどさ。それも下手なんだよ。コントロールが下手とかは良いんだけど、たまに間違っってグローブ投げて来たりするの」

「キャッチグローブになっちゃうね」

「聞いたことないもんね、そんなの。キャッチグローブなんて。あと僕が育ったそこは温泉地だったからさ。足湯なんかがあったりしたんだけど、手を入れちゃうんだよね」

「手湯だ」

「手湯だよ。『じいじ、なんで手を入れてんの？』って聞いたら、『足より手を温めたいから』だって。それ足湯でやらなくていいじゃん？」

「そうだね。ユニークなおじいさんだねえ」

「僕が中学生になった時にお祝いをくれたんだけど、何をくれたと思う？」

「えー、分かんない」

「懐中電灯」

「懐中電灯？ 中学生になった入学のお祝い？」

「そう。で、それも『なんで懐中電灯なの？』って聞いたら、『便利だから』って。いや便利だけどさ。進学祝いに懐中電灯はないでしょう」

「憎めない感じの人だねえ。私も会ってみたかったなあ」

「君にも紹介したかったよ。親戚からは抜け過ぎてるから敬遠されてたけど、僕は大好きだったからね。蛍を本当に大事にしててさ。蛍塚みたいの作って、そこに蛍を埋めて供養してたりして」

「蛍が好きだったのかな」

「好きというか、自分が守ってるんだくらいの気持ちだったのかもしれないね」

「ところで私は今日、大丈夫かな？ 翔太のご両親に最初のご挨拶、ちゃんと出来るかな？」

「そりゃ大丈夫だよ。僕が東京でお嫁さん見つけて、帰って来るんだから。昨日電話したら、すごく楽しみにしてたから」

「まあ、わざわざ東京からありがとうね」

「あ、いえいえ。〇〇です」

「〇〇さん。今、ちょっとお父さんは出ちゃってるんだけど、もうすぐ帰って来るからちょっと待っててね。まあ、こんな綺麗な子を翔太が捕まえて来るとはねえ」

「捕まえるって。お母さん、そういう表現しないでよ」

「あら。ごめんなさい。翔太は子どもの時から魚を捕まえるのが上手だったもんね」

「関係ないだろ。だいたい、あれはじいじが下手過ぎたんだよ。あ、そうだ。今日来る電車の中でもじいじの話になってさ。色々〇〇にも聞かせたんだ」

「あら、そう？ この子はおじいちゃんっ子だったからねえ。いつもおじいちゃんの後について。話を聞いてびっくりしなかった？」

「いえ、楽しいお話をたくさん聞かせていただきました。なんだかユニークな方だったみたいで」

「ユニーク？ そうかしらねえ。とっても理知的というかね、頭のいい人だったのよ」

「え、じいじが？ 理知的？ お母さんはそう思ってたんだ」

「うちの親戚はみんなそう思ってたと思うわよ。賢い人だったからさ」

「賢い？ じいじが？ おれそんな風に〇〇には聞かせてないよ。ねえ？」

「ん、うーん。おじいさん、そういう方だったんですか？」

「そうよ。もう頭の良さったら、この町で一番だったかもしれないわね」

「じいじのことだよ？ 同じ人物かなあ。おかしいなあ」

「だって、そうじゃない？ 今の釣りの話だってさ。翔太が自分で魚を捕まえられるように、わざと釣りが下手なフリしてたんだから」

「え？」

「あら、気がついてなかったの？ そうよ。自分は下手くそなフリして、翔太に魚をたくさん取らせてあげてたでしょ？」

「気がつかなかったよ。そんな風には見えなかったけどなあ。ほんとに下手だったよ」

「じゃあ芝居が上手だったんじゃない？ 翔太がいない一人で釣りに行く時は、たくさん釣って来てたんだから」

「すごいですね。そういう方だったんですか？」

「そうそう」

「いや、変だよ。そんなんじゃないはずだよ。だってさ、蛍を見に連れてってもらった時、毎年同じセリフを言うんだよ。そんなの賢い人じゃないでしょ。同じことをずっと言ってさ。おかげでおれ言うこと覚えちゃったんだから」

「覚えさせたのよ」

「え？」

「蛍を愛してたでしょ、おじいちゃん。だから、うちの土地に出る蛍はこういう特徴があってっていうのを、翔太に覚えて欲しかったの。だから毎年それやってたの。気づかなかった？」

「知らない、知らない。うそ？ そ、そんなことあるのかな。物忘れが激しかったんじゃないの？」

「違うわよ。だって、変だと思わない？ おじいちゃんがそうやって同じこと言うの、その時だけだったでしょ？ もし物忘れが激しいんだったら、他の場面でも同じことをしょっちゅう言ってたはずじゃない？ そんなことあった？」

「ない。確かにそうだ」

「なんだかすごいね。翔太のおじいさん、すごい人だっただね？」

「い、いや、あれは？ 懐中電灯は？ おれ中学進学のお祝いで懐中電灯だったんだよ。賢い人だ

「つたらもっと孫に気の利いたものくれるんじゃないの？」

「それも蛍でしょ」

「え？」

「まあ、あんたはほんとに何も気づいてなかったのねえ。懐中電灯で点滅させると、蛍が寄ってくるの、あるでしょ。それをやって欲しかったんでしょ？」

「…そうだったの？　じいじってそういう人だったの？　あ、あれは？　足湯に手を入れたり、グローブ投げたりしてたのは？　あれも何か裏に意味があったの？」

「それは知らない」

「それは知らないんだ。あれにも意味があったのかと思って」

「分かんないけど、じゃあカモフラージュじゃない？」

「カモフラージュ？　なにそれ？」

「だから、蛍の時だけとぼけてたら、ほんとは賢い人だったんだってバレちゃうでしょ？　だから、そういうニセのとぼけをちょいちょい織り交ぜてたんじゃない？」

「いや、なんでそこまでするんだよ。蛍のことも普通に教えてくれたらいいじゃないか」

「可愛がってたのよ、あんたのことを。ほら、うちの親戚はみんなおじいちゃんのこと頭が良過ぎるから、ちょっと敬遠してたところあったでしょ？　話についていけなかったりとかさ。翔太とはそういうんじゃないよ、仲良くしたかったのよ。そうやっておじいちゃんなりに可愛がってたんじゃないの？」

「わざとだったなんてなあ。全然気がつかなかったよ」

「すごいね。翔太のおじいさん。そういう人だったんだね」

「僕の中のじいじの像と、さっき母さんから聞かされた話が違い過ぎて、まだ頭が追い付いてないよ」

「そりゃそうかもしれないね。凄い人だったんだ」

「…気づいてやれてたら良かったなあ」

「でも、それはいいんじゃない？　気づかないまま。おじいさんは気づかれないまま、最期まで行きたかったんじゃないかなあ」

「そうかなあ。…そっか。そうかもね」

「うん。…蛍、綺麗だねえ」

「そうだね。良かった。〇〇をここに連れて来たかったから」

「ありがとう。私、蛍見るの初めて」

「そっか。僕がじいじと見ていた蛍は、これだよ」

「ずっと変わってないんだね。ここの景色は。まるで子どもの頃の翔太のことをちょっと知ることができたみたいで嬉しいな」

「ほんと？　なら良かった。じいじと毎年、来てたからね」

「そうだったんだよね。なんだか今日の話を知ったら、おじいさんに私も会ってみたかったなあ」

「…会えるよ」

「え？」

「会える会える。会えるから」

「ん？ どういうこと？」

「今から、合わせてあげるよ」

「え？」

「ちょっと見てて。『翔太、蛍はな、だいたい二週間で死んでしまうもんなんだが、この土地の蛍はちょっと違うんだ』『へえ、そうなんだ、どういう風に違うの？』『この土地の蛍はな、40日もの間、見ることができるんだ』『へえ、そうなんだ。なんで？』『翔太に教えてやろう。まずゲンジ蛍が二週間、その後ヘイケ蛍が二週間、その後ヒメ蛍が二週間、順番に順番に出るんだ。だから他のところより長い間、蛍を見続けることができるんだ』『へえ、そうなんだ。すごいね』『ああ、すごいだろう？』『うん、すごいね』『翔太もな、せっかくこの土地に生まれたんだから、蛍を大事にするんだよ』『うん、わかったよ』」

「…すごい。まだ覚えてるんだ」

「うん。これで僕はいつでもじいじに会えるから」

「…やっぱり凄い人だ」

「うん」

「おじいさん。〇〇と申します。翔太さんと結婚することになりました。よろしく申し上げます」

「…『初めて見た蛍の感想は？』」

おわり